

文法研究の現状と展望

李暲洙*

〈 Abstract 〉

Current Trends and Prospects of Studies on Japanese Grammar

This paper examines research articles, published in Korean academic journals in 2017 and 2018, on Japanese grammar and explores their current trends, clarifies special features, and provides insight into the prospect of future studies on Japanese grammar. I tried to divide Japanese grammar into several categories. This paper will examine research articles on Japanese grammar that have been published in papers. Descriptive grammar studies, Contrast research between Korean and Japanese, Translation research applying contrast studies, Application to Japanese language education and grammar research, Research using corpus, Cognitive semantics and cognitive grammar, Politeness and discourse, Various research methods were used. besides, The trends of the Japanese grammar research which is found in the Japanese Linguistic Society was clarified. The direction and contents of the research being done in the book seems to have not changed much in the way of research in Korea.

Therefore, it can be said that research on Japanese grammar in Korea is carried out similarly to international research on Japanese grammar.

There are not many announcements, postings, or research findings by Korean researchers at Japanese academic conferences, seminars, etc.

This is because Japanese academic societies do not acknowledge much in the field of research in Korea. It is because research articles highly evaluates academic papers registered in the Korea Research Foundation. I think that such phenomenon will prevail for the time being. I think research articles will change positively as the standard of evaluation in Korea changes. In spite of such bad conditions, Korean researchers should positively announce a lot in Japan.

Field : Syntax, Morphology

Keywords : Cognitive grammar research, Grammar researches, Corpus researches, Diversification research, Contrastive research

1. はじめに

言語学の見地から見た文法は言語の文の体系をなす規則で、ある個別言語の話し手が従うべき言語規範である。すなわち、言語を文、文節、語などの単位に分けて考えたとき、そこに見られる規則的な事実を体系化した理論を文法論と呼ぶ。日本語文法という領域は昔から多くの文法現象が様々な観点から研究されてきた。その範疇は非常に幅広く、その内容を細かく分析することは困難である。人間は絶えず言葉を使って生活しているため言語の変化や文法の進化が見られるためである。社会の中で円満なコ

* 韓国放送大学校 教授、日本語学

コミュニケーションをとるには読む、書く、話す、聞くという言語の4機能が基本となる。その中で、正しい意味を伝えるために誰もが適用している「文のきまり」を自然に獲得するのが文法である。文法のカテゴリーは形態素を含む語の構造、品詞、文の構造、助詞、助動詞、命題、述語、複合動詞、補助動詞、複合助詞、テンス、アスペクト、モダリティ、複文、とりたて詞、など様々な形に分類できる。韓国での日本語学分野の日本語文法に関する研究範囲は日本での研究とほぼ同様である。

韓国での日本語学研究は1970年代においては、中古時代の文学を理解するため、難解な古典文法に関する研究や日本語学に関する研究が主流であった。しかし1980年以降、現代日本語文法や対照研究に関する研究が徐々に現れてくる。それはソンミン、ソジョンズ、ホンサマンなどの韓国語学者により日本語研究や韓国語と日本語の対照研究が始まる契機となった。1990年以降の現象としては日本の現場での日本語学研究の影響と、日本に留学してきた研究者の増加によって、研究の方向性が変わりはじめた。外国人の日本語研究において日本語文法の研究と日本語教育の研究との関係が深まり、文法と教育の研究は切っても切れない関係になったのである。日本語文法は言語学の流れに、日本語教育は英語教育に強い影響を受けている。日本語文法や日本語教育においては言語の4機能がメインであり欠かせない要素であるが、更に言語文化や言語行動などと関連させているのが最近の語用論研究や社会言語学研究である。外国語教育では言語の4機能を習得する上で文法教育や文化教育などを重視する傾向がある。日本語文法研究での重要な要素は語から文への複雑な構造を解明することであるが、それだけで解明することは難しい。文法研究と教育研究を共に成功的な結果に導くには教育現場の主要素である教科教育学(教授学習理論、教材教具論、媒体、評価、教育実習などの要素)の内容と結び付ける必要がある。ここで言う教科教育学は正しい文法を習得させることで学力を伸ばし、言語生活においてよりよい人間性を作ることを目的としている。日本語から日本語文法、日本語文法から応用日本語、応用日本語から日本語教育へと発展させていくためには言語学の流れにそって日本語文法を把握する必要がある。すなわち日本語文法の流れを知っておく必要があるのである。

本研究では学会の学術雑誌に出ている研究内容を概観、調査し、主題別内容別に分け論じるが、既存の日本語学の分類と研究方法とは若干異なっている。調査の目的としては日本語文法の現況を通じて新しい研究の可能性を提示し、実際の日本語教育に応用するための案が模索できよう。2000年代前後には日本でも韓国でも日本語のモダリティに関する研究が流行していた。日本語のモダリティ研究は言語学で言うムードに日本語式の言語学を応用し、話者の心的態度を表す要素を作り出した日本式のムードの研究の一部である。語学上の本来の「モダリティ」という概念は言表事態や「主観性」一般のことではなく、専用の述定形式をもって非現実の事態を語るときに生ずる意味のことである。日本語学でいう文の成立に関わる陳述という概念は山田孝雄(1936)からはじまっていると言ってよいだろう。その後、時枝誠記(1941)が山田を支持し持論を展開したが、現代の日本語学の陳述論を展開し応用しているのは寺村秀夫(1982)であろう。仁田義雄(1989)はこれを確実に支持し研究を拡大している。その後、積極的に理論化、支持し、拡大しているのが益岡隆志(2007)である。モダリティは、言語活動の基本単位としての文の述べ方についての話し手の心的態度を表すことで、文レベルの機能と意味のカテゴリーとして見ている。これについては研究者によって意見が異なる。モダリティの代表的な研究者のひとりが尾上圭介(1997)であるといえる。尾上圭介は叙法論としてのモダリティ論を主張し、日本語の述定形式についてその事態の成立と存在を積極的に取り入れている。命題の対立概念として扱うモダリティ論を主張する仁田義雄・益岡隆志とは立場が異なる。仁田、益岡は異なる客観的な事柄内容である「命題」と話し手の発話時現在の心的態度である「モダリティ」を扱っている。仁田、益岡は山田、時枝、寺村と近い言

語観を持っているといえよう。寺村秀夫(1982)は、山田の陳述論、すなわち相互承接する助動詞のほぼテンス以下の要素をムードの中に織り込んでいた伝統的な日本語学を、日本語教育の流れに応用した。実際のところ、日本語学においては文の成立に関わる重要な概念をモダリティとして扱っている仁田派が主流であるが、元々は英語の助動詞(must・may・can等)が表すムードを日本語式にモダリティと変えたのである。尾上は1990年代後半から仁田派のモダリティを批判している。尾上による批判の立場からの研究は2000年代からは少し減少してはいるが、中国や韓国では続けられている。それらを対照言語学や日本語教育に応用した研究は以下に挙げられる。

- ・牟世鐘 宋洙珍(2017)「モダリティ形式の韓国語訳について一わけだを中心に」『日本言語文化』41
- ・成昊炫(2017)「「のだろう」の推量特性について一「だろう」と「ようだ」「らしい」との比較を通して」『日本語文学』75
- ・金熹成(2017)「未来現事態の予想を表す「そうだ」と「ようだ」」『日本学報』113
- ・宋惠仙(2018)「日本語のやりもらい構文のボイス性とモダリティ性—日本語教育文法の観点から—」『日本言語文化』67
- ・李鳳(2018)「日本語の「カモシレナイ」に関する考察」『日本語文学』76
- ・宋恩仙(2018)『日本語のやりもらい構文のボイス性とモダリティ性—日本語教育文法の観点から—』67『日本文化研究』

牟世鐘・宋洙珍(2017)と成昊炫(2017)は日本語のモダリティ形式を探し出し対照分析した研究で、典型的な応用日本語学に当たる研究である。牟世鐘、宋洙珍(2017)はモダリティ形式の韓国語訳についての研究で「わけだ」を中心に考察しているが、成昊炫(2017)は「のだろう」の推量と推量のモダリティ形式との違いを通じて考察している。宋惠仙(2018)、李鳳(2018)、金熹成(2017)は日本語教育の観点からの研究や類似のモダリティ形式を探しだしその特性を明らかにしている。このように対照言語学的観点と日本語教育学的観点からのモダリティ研究には変化が見られる。この研究を裏付けるのが日本での研究で、日本語学の研究雑誌からもその内容が窺える。最近では「日本語文法」の特集「日本語文法研究と教育との接点」で和田尚明(2018)「日本語文法」18—2「新しい学説はどのように外国語教育に貢献するのか—モダリティ・心的態度・間接発話行為の日英の違いを言語使用の三層モデルから説明する—」という論文が見られる。実際に日本では本来のモダリティ研究は少なくなったとはいえ、ほかの領域と結び付いて応用している研究は現在でも続けられている。文の構造を分析し、文の規則を論じる研究は日本語教育においても重要である。

2000年以降、韓国における日本語研究の多くは日本語文法¹⁾についてであるが、中でもモダリティ研究が続けられているのは外国人研究者による研究があるためである。今まで伝統的な日本語文法のカテゴリーであったところにモダリティを加えることで、日本語文法研究の活性化の一翼を担っていると言える。日本語学の研究は日本語²⁾分野でも日本語文法研究がメインであったということは、文法を科学的かつ論理的に研究し、外国語と対照、応用することで、教育的に活用可能な研究になるからであろう。モダリティ³⁾とは、事実を述べる部分を命題、話し手の気持ちを述べた部分をモダリティというよ

1) イ、カン、ミン(1945-1987)の調査では日本語学の研究分野の中で日本語文法研究は219編で74%以上である。

2) パクヘハン(2011,85)では韓国の日本語学研究の内容の観点から分野間の融合複合研究や他分野研究との連携、日本語教育学や韓国両言語の対照研究なども視野に入れて研究すべきであるという方向性を提示している。

うに、命題すべてを包み込んでいる。

モダリティ研究において、文法の研究領域に少しずつ変化が見られるようになった。そのほかにも記述的研究の変化や多様性の研究、コーパス研究、コーパスを利用した研究、日本語教育学的研究、対照研究、言語類型論研究、普遍性研究などの多様な研究方法の変化の影響がある。これらは日本語文法研究を応用し、活用する研究の一部であり、日本語学研究の観点が変化している手がかかりにもなる。韓国日本語学会で発表された真田信治(2017)の研究「新しい日本語観に向けて一複数の日本語という視点」では日本語の国際化は外に向かったの国際化のために海外からの情報を取り寄せ、外に出向くことに力を入れることが肝要だと述べていたのだが、内なる国際化に目を向ける姿勢が必要であると強調し、一脈相通じている。隣接言語の言語学的視点からの研究は新鮮であり、外国人との研究の共生が重要であることを主張しているのだ。又、言語と方言の違い、言語変化の多様性などに注目する必要と同時に、外国語の新しい変化に関連する流れの観点からの多様な研究が望まれる時期である。

2. 分析対象と研究範囲

韓国での日本関連研究が本格的に始まったのは1973年からである。この年、学術雑誌『日本學報』が創刊されたが、それはまさに日本語研究の胎動期を示している。続いて『日語日文学研究』(1979年創刊)、『日本語学研究』(1999年創刊)、『日本語教育研究』(2001年創刊)が発行されている。また地方各地でも日本関連専門学術雑誌が多々発行されている。その他、日本語教育学会『日本語教育』は1985年に、大韓日語日文学会『日語日文学』は1991年創刊である。また名前がほぼ同じ学会もある。韓国日本語学会『日本語文學』は全羅道を中心に活動しているが、日本語学会『일본어문학』は慶尙道を中心に活動している。両学会共に1995年創刊である。その翌年1996年創刊の忠清道を中心に活動する日本文化学会『日本文化學報』は創刊当時、学術雑誌のタイトル、内容ともに人気を博した。『日語日文学研究』第1輯の11編の論文中、文学8編、語学3編であった。その中で日本語文法は1編(日本語における否定表現の考察)である。圧倒的に文学が多い時代であった。

韓国の日本関連学術雑誌中、研究財団の搭載雑誌は多数ある。特に研究所⁴⁾の雑誌、財団の搭載雑誌もあるがここでは取り扱わない。論文の量的調査を通じ研究状況と方向性を提示するため、対象とする

3) 最近、日本の龍谷大学国際社会文化研究所叢書として「機能文法による日本語モダリティ研究」が出版された。機能文法の枠組みによって日本語モダリティを分析している。機能文法は、1960年代からMAKハリデー教授を中心として築き上げられた機能文法体系で、メタ機能(観念構成、対人的、テキスト形成)によって、言語の意味や機能を分析する研究である。このような枠組みを用いて日本語モダリティを分析していく内容である。

4) 翰林大学の研究所である翰林日本學研究所は1994年に設立され、1995年に第一回韓日国際シンポジウムを開催、雑誌を『翰林日本學』として出版する。1985年には韓国外国語大学で日本文化研究会が発足、論文集『日本文化研究』の学術誌が創刊され、1990年に本格的に日本文化研究所が発足した。又、東国大学日本学研究所の開設は1979年で、その翌年1980年には日本学研究所の開設記念国際学術講演会が開かれ、1981年に学術雑誌『日本學』が創刊される。以上のように多くの研究所で学術行事が行われ、日本関連研究に参加してきた。これら以外にも多くの日本学関連研究所が設立され活発に研究活動が行われている。この調査ではすべての学術雑誌や研究所の論文は調査できなかったが、学術活動や研究が活発に行われているところを中心に調査することにした。ここでの研究対象になっている学術雑誌から日本語文法を中心に抜粋した論文を基に論じる。

のは2017-2018年に韓国の学術雑誌10種で発表された論文である。以下は学術誌別の論文総数と文法論文数である⁵⁾。『日本學報』15編、『日語日文学研究』39編、『日本語教育』24編、『日本語学研究』11編、『日本語教育研究』13編、『日本文化學報』9編、『日本語文學』7編、『일본어문학』9編、『日本言語文化』11編、『日語日文學』10編の学術雑誌から日本語文法を中心に抜粋した。これらに収録されている150編の論文を計量的な観点から分析した。学術雑誌の多様な分野の文学、文化、日本学、日本語教育、日本語学などから日本語文法のみを抜粋し調査した。イ(2012)の調査によると、日本関連論文全体に文法論文が占める比率は2000-2006年は35%、2007-2010年は31.2%であると報告されている。この数字と比較すると、今期の一つの特徴は文法論文数の減少である。その一因は日本語教育という分野の成長とも関連すると考えられるが、実際には日本語学の分野が広がったこと、そして日本語教育の論文が多くなったことから減少したようである。日本語学に特化した専門紙は一つのみだが、日本語教育に特化した学会と学術雑誌は二つある⁶⁾。国内の日本人研究者や論文などが増加しているのは学会の常任理事、一般理事、役員の増加、大学での評価の影響が大きいと言える。学術雑誌『日本語教育研究』を発行する日語教育学会の会長は2019年から日本人となっている。これは新しい日本語教育へのパラダイムになるにちがいない。また日本語教育という研究分野が活性化している証拠でもある。又、日本、中国、台湾などの海外の学会との連携、協働、拡大などの相互協調とも関連するところが多いであろう。

3. 韓日両言語の対照研究

3.1 巨視的観点からの対照研究

2018年、日本での日本語学会のシンポジウムの概要として現代語と古代語、そして対照文法の可能性が課題とされた。1990年代にやや停滞したかにみえた文法研究は、世紀が変わる前後から、多くの研究者が登場し研究活動をしている。対照研究はそれほど多くないが、新しい研究の可能性や研究の傾向が見られる。具体的には①見出しされた言語現象を、言語史として体系的、構造的に叙述しようとする意識、②歴史コーパスの利用、③進展した現代語文法の知見の利用、対照文法が行われている。③については、現代語文法の視点で古代語を研究する手法が一般化したものの、その方法論や功罪について、表立った反省、検証はなされていないように思われる。対照研究は大きな実りをもたらしているといえる。このような状況を踏まえ、シンポジウムでは、新しい研究の可能性を見いだすことができた。生越直樹(2018)によると、日韓両語の対照研究は1980年から本格的に行われるようになり、日本語学、韓国語学、言語学研究などに多くの面で影響を与えていると述べている。多くの対照研究が統語論、統辞論的、テンス、ボイス、アスペクト、複合動詞、やりもらいなどであった時期もある。2000年前後からモダリティ、談話分析、言語行動、社会言語学的研究、認知言語学的観点からの研究が活発に行われている。2010年以降、対照誤用論、省略、縮約などの研究も行われている。しかしながら、研究の多くは韓国語と日本語が1対1に対応しているように見えるが、実際は対照とは異なり、対応関係から出発して

5) 文法というカテゴリーから抜粋した論文であるが、文法カテゴリーという基準が曖昧で異なる場合がある。

6) 韓国日本語学会は日本語に関する専門学会であるが、韓国日語教育学会との違いはあまり見られない。

また韓国日語教育学会と韓国日本語教育学会は名前は類似しているが、内容は異なる。韓国日本語教育学会は文学や文化なども多く日本語教育の専門紙とはいえない面もあるが、韓国日語教育学会は日本語学や日本語教育のみであり日本語教育の専門雑誌と言える。

いる。今までは形態的統語的研究は扱いやすいため多くの面で幅広く扱われてきたが、今後は対照研究を通じ、実際の日本語教育に応用できるような研究が望ましくなる。韓国語と日本語の対照研究の中で盛んに議論されるような論文の一部を紹介する。

- ・ Sung Ji Hyun (2018) 「의도를 나타내는 보조동사 「~てやる」 의 한·일대조연구」 『日語日文学研究』 106
- ・ 尹盛熙(2017) 「日本語と韓国語の名詞連結構成」 『日本学報』 112
- ・ 文彰鶴(2017) 「意思表現に関する日韓対照研究」 『日本言語文化』 41
- ・ 權城(2018) 「推測表現の言語論的な用法の日韓対照研究」 『日本語文学』 77
- ・ 金光泰(外)(2018) 「推し約束取消し行為の談話構造及び談話ストラテジー」 日本言語文化』 43
- ・ Nam, Young-Bok(2018) 「「NP+을/를」と「NP+に/を」の対応について」 『日本語文学』 80
- ・ 文彰鶴(2017) 「문법화 형식의 부정의문문에 관한 일한대조연구」 『日語日文学研究』 100
- ・ 김지희(2017) 「일한 매뉴얼 경어에 관한 연구: ‘~になります’와 ‘~」 『日本語教育』 78
- ・ Choi Sun-hee (2017) 최근 한일 명령표현에 관한 고찰- 「~いただきます」와 「~실개요」를 중심으로- 『日語日文学研究』 101
- ・ Choung Young Mi (2018) 「수락에 대한 한일대조연구 -청유행동에 대한 설문조사를 바탕으로-」 『日語日文学研究』 105
- ・ Kim Gyeyon(2018) 「한·일 섭식동사 관용표현 대조고찰-섭식동사의 의미역할을 중심으로-」 『日語日文学研究』 104
- ・ 鈴木梓(2018) 「配慮表現としてのテムルと아/어 보다: 待遇表現としてのテ形補助動詞における間主観性」 『日本語教育』 82
- ・ 韓京娥」 (2018) 「授受動詞皮肉用法に関する日韓対照研究」 『日本学報』 117

ここで面白いのはSung Ji Hyunの研究で巨視的な視野から扱っている。この論文は意図を表す補助動詞「~てやる文」を韓国と対照した研究である。「~てやる」にある「試みる」という意図を表す韓国語の「~해 주다」との相違点や類似点を明らかにした研究である。「하겠다」に近く、話者の意志が強い。この論文では対話だけでなく非対話（心の中で決める内容）を区別し「~てやる」と韓国語とを対照研究している。強い意志を表す「~てやる」と対応しないという、先行研究と異なる意見を提示し、「~てやる」に「해 주지」「해 주겠다」に対応する形もあることを対照研究を通じて明らかにしている。

尹盛熙「日本語と韓国語の名詞連結構成」では主に週刊紙のヘッドラインの主題と事件に関する内容を分析し、韓国と日本の報道のスタイルや統語的構成要素の違いなどを明らかにしている。共通の状況の下で読み手の関心を引こうとする試みや、外的要因に触発されるスタイルが各言語ごとに方式が異なり、極度に違う形で現れている。このような対照研究は既存の研究と異なり、新しい見方を導入した研究と言える。最近インターネットやスマートフォン、動画などに見られる省略表現、宿約表現、新造語などが多い。ここに現れる多様な言語現象や状況を応用し、新しい研究のスタイルに応用ないし活用すべきである。

文彰鶴「意思表現に関する日韓対照研究」は文法形式と文法化形式を中心に行われている研究であるが、意思表現の1対1の対等な対照研究よりは対応する形式の特徴を概観している研究だと言える。注目すべきは日韓両言語の意志の文法(化)形式を選び出し論じたことである。しかし、あまりにも包括的に扱っているため、何が如何に文法化されていくのかが明確でない面が残念である。ここでは「어아지」「어아겠」という文法化形式を扱っているが、文法化されていく過程が不明確である。

權城の「推測表現の言語論的な用法の日韓対照研究」は推測表現である「だろう」「はずだ」「かもしれない」を中心に、「ㄹ지도 모른다」「断定」との対応関係を語用論的な観点から扱っているが、対応関係がメインで語用論的な扱いが足りない面がある。より具体的に語用論的な内容を明らかにすべきである。金光泰(外)「推日約束取消し行為の談話構造及び談話ストラテジー」は約束の取り消し場面での談話スタイルを、談話タイプ、談話構造、談話ストラテジーから分析した内容である。注目すべきは日本の女性の場合、間接的に取消の意志を伝える談話スタイルが、韓国の女性より圧倒的に多いという結果である。このような結果は異文化コミュニケーションの談話スタイルの違いから得られることが多い。この研究のデータではなくても予測できる結果であるといえる。よってどのような談話スタイルを取るべきか、根本的な違いはどこから出てくるのかを明らかにすべきであろう。

Nam, Young-Bokの「「NP+을/를」と「NP+に/を」の対応について」の研究は「「NP+을/를」は「NP+を」に対応したり「NP+に」に対応する動詞が一部分であること、また辞書や日本人のinformantの許容度の判定から自然な11個の動詞を明らかにした。寺村(1982)で述べている働き掛け性の強いものに意味的根拠になっていることと一致していると裏付けている論文である。

김지희「일한 매뉴얼 경어에 관한 연구」や Choi Sun-hee「한일 명령표현에 관한 고찰」は「ていただきます」と「-실개요」を中心に考察する会話文の研究である。Choung Young Miのアンケート調査による研究「수락에 대한 한일대조연구」Kim Gyeon「한·일 십식동사 관용표현 대조고찰」、鈴木梓「配慮表現としてのテミルと아/어 보다」、韓京娥「授受動詞皮肉用法に関する日韓対照研究」は用法からみた文法の対照研究である。

その他、權勝林(2018)「受け身文の日韓対照分析」、Park, Yong-II(2017)の「一てみる」「-어 보다」文のSyntactic Structureと意味、金秀榮(2018)の「日韓両言語の補助動詞「てある」「ておく」と「아/어 놓다」「아/어 두다」の対照研究、オジュョンの「日本語の授受表現の韓国語翻訳に関する考察」などがある。最近の研究に目立つのは1:1の対応関係にある対照研究で増加傾向にある。

3.2 翻訳研究と対照研究

最近、文法研究の範囲が広がっているのは翻訳と対照研究である。ボイス、文脈指示、人称代名詞、呼称、婉曲表現などの翻訳内容を対照しつつ研究に取り入れており、まだ数はそれほど多くはないが、増加傾向にある。翻訳と対照研究では日本語を韓国語に、韓国語を日本語に翻訳した際、翻訳された内容を対照研究と関連づけている。これは日本語学的研究ではあるが、実際の教育の現場で応用できる作文の教育や翻訳教育にもつながるため、広い意味での文法研究の一種と見てよいだろう。その内容は対照研究の範囲に含まれることが多い。

- ・ 유수연 (2017) 「일·한어 사동표현의 대응 양상과 史的 변화:
20세기 초기 이후 일·한·일 대역 자료를 중심으로」 『日本語教育』 79
- ・ 李尚秀・金希燮 (2018) 「大学における日本語の翻訳教育」 『日本語教育』 82
- ・ Lee Ju-ri-ae(2017) 일한 번역의 문맥지시어 고찰-
지시어 `こ` `そ`의 학생 번역 분석을 통하여- 『日語日文学研究』 101
- ・ Sasa Hiroko(2017) 「번역에 나타나는 역할어에 관한 고찰
- `해리 포터와 마법사의 돌` 영일·영한 번역문을 연구 대상으로 -」 『日語日文学研究』 100

- ・ Tak Sung-sook (2018) 「한·일 양국어의 인칭대명사와 호칭
- 호토토기스(不如歸)와 불여귀·두견성의 대화문을 대상으로-」 『日語日文学研究』 107
- ・ 이하자 (2018) 「한·일 『완곡 표현 고찰: 겨울연가』 · 『冬のソナ타』에 나타난 표현을 중심으로」 『日本語教育』
- ・ 李忠奎(2017) 「「맞기는 뭐가 맞아!」類に関する一考察: 日本語との対照も含めて」 『日本語教育』 78

たとえば유수연は「일·한어 사동표현의 대응 양상과 史的 변화」の様相を明らかにしており、日本語や韓国語の20世紀初期以降の対訳資料を使って研究している。又、李尚秀・金希燮は「大学における日本語の翻訳教育」という大きな枠の中で行われている。日本語関連学科でも翻訳教育は教科過程の中に多様な形で応用されている。

更に多様な研究としてSasa Hirokoは翻訳に現れている役割語に関する研究の中で、英文の作文を韓国文に訳したものや日本語文に訳したものを研究対象にしている。注目すべきは同じ環境ではないものの、英日翻訳文の考察で、扱い方が非常にユニークな対照になっている。これも新しい研究方法を示しているといえるだろう。

Tak Sung-sookは「한·일 양국어의 인칭대명사와 호칭」は人称代名詞や呼称を通しての対照研究である。이하자는『冬のソナタ』に表れる婉曲表現の対照研究、李忠奎は韓国語で一言で言えない曖昧な表現である「맞기는 뭐가 맞아!」類に対する日本語の表現の対照研究を行っているのだが、翻訳と対照研究を結び付けている研究であるといえる。また最近の一つの言葉をターゲットにし、1対1の対照研究や英文の原文を日本語や韓国語などに翻訳したときに現れる訳文について研究するなど、新しい翻訳様相の研究が目立つ。

3.3 1対1の対等な観点からの対照研究

これまでスケールの大きい包括的な対照研究が多くなっていたが、最近是对のある一つの言葉を探しだし、対照研究を行う研究が活発に行われている。これまでの規模の大きい研究を細かく深く研究するような、一步深化した研究である。動詞、名詞、形容詞、副詞、助詞など幅広く行われている。

- ・ 劉恩聖(2018) 「韓日尺度形容詞の対照研究 「많다(多い)」と「깊다(深いを中心に)」」 『日本語教育研究』 43
- ・ 金庚洙(2017) 「「前に」節と「전에」節の再考」 『日本学報』 112
- ・ 李忠奎(2018) 「切斷動詞「切る」「자르다」の対照研究」 『日語日文学』 77
- ・ 金炫秀(2017) 「韓国語[보다]と日本語「見る」가 포함된 慣用句意味形成の様相考察」
- ・ 조은정·윤강구(2017) 「「でる」와 「나가다」의 의미에 대한 대조연구」 『日本語教育』 79
- ・ Yoo Eun-sung(2018) 「일본어 표현교육을 위한 「재미있다」와 「面白い」의 대조연구」 『日語日文学研究』 104
- ・ Yoo Eun-sung (2017)한·일 감정형용사의 대조연구 - 「기쁘다」와 「ウレシイ」를 중심으로 - 『日語日文学研究』 101
- ・ 中坂富美子・李德培(2017) 「程度副詞の類義語に関する韓日対照研究: 「가장」「제일」と「最も」「一番」を中心に」 『日本語教育』 81
- ・ Min Seunghee(2018) 「1인칭대명사 '나', 'わたし', 'I'에 관한 통시적 관점에서의 대조 분석」

『日語日文学研究』105

- ・Min Seung-hee(2017) 「2인칭대명사 '너', 'おまへ', 'thou'에 관한 통시적 관점에서의 대조분석」

『日語日文学研究』102

- ・Nam, Young-Bok(2018) 「「NP+을/를」と「NP+に/を」の対応について」『日本語文学』80

劉恩聖「韓日尺度形容詞の対照研究「많다(多い)」と「깊다(深い)を中心に」では「많다, 깊다」に対応する「多い、深い」の違いを明らかにしている。特に「많다」「많은」に対応するのは「多い」「多くの」「大きな」「大きい」「高い」「深い」など多様な形で表されるという面白い結果を出している。金庚洙「「前に」節と「전에」節の再考」は先行研究で述べている内容をまとめながら意味、機能と結合関係などの多様な内容を記述している。また構文上の違いが見られる視点の説明や、文法の変化現象である文法化の他動性の理由などを説明している。

李忠奎「切斷動詞「切る」「자르다」の対照研究」は辞典的研究から始まって本動詞の対応関係や複合動詞の対応関係を明らかにしている。しかし、語彙的複合動詞や統語的複合動詞の手がかりとなる基準が明確でない。さらに二つを見分けるテストフレームを設けないまま「泳みきる」と「疲れきる」を統語的複合動詞と言い切る誤りが見られる。また複合動詞「~切る」が「~자르다」に対応していないと述べているが、「呑みきる」の場合は「(이로 짝) 물어 자르다」に対応しているということを見逃している。金炫秀「韓国語「보다」と日本語「見る」の含まれている慣用句意味形成の様相考察」ではそれぞれの言語において意味形成にどのように関係し、どういうメカニズムが働いているのかを明らかにしている。慣用句を比喻のメタファーとメトニミー、イメージスキーマなどを活用して「보다」と「見る」の様相の特徴を明らかにしている。より多くの内容を集めた場合、普遍的現象なのか特別な現象なのかを見極めることが重要である。

又、조은정・윤강구는単純動詞で「「でる」と「나가다」の研究」、Yoo Eun-sungは「재미있다」と「面白い」、「기쁘다」と「ウレシイ」、中坂富美子・李德培は「가장」「제일」と「最も」「一番」、Min Seungheeの「'나', 'わたし」、Min Seung-heeは「2인칭대명사 '너', 'おまへ」の通時的な観点からの研究などを明確にしている。又、NPの観点から考察している助詞の役割により変化された様相を明らかにするNam, Young-Bokの「을/를」と「に/を」の研究などがある。

その外に金賢娥(2017)「軍隊用語「-지 말입니다」に関する一考察」の研究では日本語の終助詞に相応する用法を中心にしている。話者の柔らかい叙述態度を表す韓国語に当たる日本語の表現様式を考察したのである。これは韓国語の「지 말입니다」「말입니다」「ㄴ말입니다」と異なるので日本語では終助詞の働きが重要であるという研究である。これらに対応する「え、ですね、さ、よ、ですよ」は韓国軍隊文化独特の言葉使いの特徴と言える。

「日韓受動形自動詞の用法の対照研究」や推量表現「そうだ、ようだ、らしい」の韓国語の対応研究は20年前と同様で、変わらない研究テーマや研究方法も未だに存在しているのも現実である。しかし、研究内容や方法などが変わったものもある。權勝林(2018)「受身文の日韓対照分析」はテーマは同じでも内容は一歩進んでいる。韓国語の受身文の成立条件と意味類型の記述は日本語の受身文の分析を取り入れる新しい観点からの視点ではあるが、タイトルは20年前と変わらないので洗練されたテーマの工夫が必要となる。最近では生越直樹(2018)が韓国日本語学会で「日韓対照研究の実践と課題一名詞文の使い方を例に」というテーマで紹介した対照研究が注目される。最近の日韓対照研究の論文として発表され、談話分析や文レベルや語用論などでの対照研究が注目を浴びているという。

- ・堀江・金廷珉(2011)「文末での 것 같은 みたいな」、堀江(2016)「対照語用論」、堀江(2013)「日韓の非述語文」、高木(2012)「話終了文」、尹盛熙(2016)「日本語の翻訳字幕における省略宿約の実現—韓国語との対照分析—」

これらの論文で日韓対照研究は扱う文や視点とともに新たな段階に差し掛かっていると述べられており、文レベルと談話レベル両方に絡む問題の事例として名詞文を取り上げている。生越(2018)では日本語の動作性名詞のとき、場面や文脈で話し手と聞き手が情報共有しているときは、述語部分を省略して「の」で結び付けるが、韓国語では簡単には述語部分を省略できないという点を明らかにしている。また字幕での省略の情報の違いについても指摘している。結論として韓国語は動詞的な表現を好む反面、日本語では名詞的な表現を好むため、このような違いが出るという。ボイスの場合、韓国語は直接的な表現を好むが、日本語では間接的な表現を好むためこのような違いが出るのだが、これと同様である。これらに通じる点は、日本人は複合動詞を好み、韓国人は副詞と動詞との組み合わせを好むということであろう。

最近では文レベルの対照研究や単純動詞の対照研究が目立っている。その代表的なものが朴(2018a,b)と金(2018)である。朴壩一(2018a)では生成文法の一つである階層的統語構造と意味という内容を終結文である「日本語のv終える」文に「韓国語のv—gi-reul-ggunneda文」「da-v」文が対応する理由について、両構造が単文としての表層構造と限界性というアスペクチャルな意味で一致しているという手がかりを明らかにしている。また朴壩一(2018b)は統語構造を明らかにした類似の研究「¹はじめる文の統語構造と意味の関係—対応する韓国語との比較考察—」において両言語の類似である表層構造を持つ複文構造、アスペクトの限界性を明らかにしている。

金慶恵(2018)では「あける」「ひらく」と「열다」「퍼다」の意義素を抽出し、対照研究を行っている。対照研究ではないが、han wonhyung(2017)は「～てくださいに関する一考察—韓国語訳の多様な待遇度を通じて—」がある。これはこれまでの研究(해 주세요, 해 주십시오)と違い多様な翻訳の事例(해 줘, 해요, 해줘요など)のように相手に対する待遇度がそれほど高くないという事例を通じて明らかにしている。両言語の文法研究でありながら効果的な指導や評価に関する面白い研究が目立つ。

- ・持田裕見子・伊吹早耶香(2017)「韓国語母語話者への「マス形+ながら」の効果的な指導—〇면서との対比を通じて—
- ・金知垠(2017) 話しかけへの応答からみるマイナス評価表出の日韓比較—隣接ペアの成立との相互作用を中心に

持田・伊吹(2017)の研究の特徴は「ながら」の授業指導案を作る点である。導入、指導前調査、授業解説、指導後調査などタイムテーブルを作っている。ここでのポイントは効果的な指導をするため、指導内容、備考、注意点を作成し提示している点である。

金知垠(2017)では話しかけへの応答からみるマイナス評価表出の日韓比較を行い、評価に関する両言語の言語行動の一部を明らかにしている。日本では上下関係や親疎関係を問わず問いかけに回答する傾向が強く、韓国では親しい間柄では問いかけに対して回答しない傾向にあるという事実を明らかにしている。韓国では親しい関係なら回答しなくても親しい関係の維持には大きく影響しないという事実は面

白い。

韓国語、中国語、日本語という個別言語をより深く研究するためには世界の言語の特徴をも参考にする言語類型論的な観点から見る必要がある。もっともこの種の観点は個別言語研究だけではなく、対照研究においても同様で、文法、意味、語形成で扱う文法論をどこまで入れるべきか難しい作業であり、語彙論や統語論や形態論の関係を究明することも難しい。大きなカテゴリーとしては、動詞分類、複合名詞と複合動詞、名詞と複合動詞、モジュール形態論、深層と表層、語彙的複合動詞と統語的複合動詞、中間的複合動詞の究明、テストフレームの決め方、複合動詞内部の文法的問題の取り扱い、慣用句や名詞句、項、やりもらい、複文構造、敬語、などを基準にしている。ここで対照研究やコーパス利用や認知文法と関連づけて日本語文法の研究をすればまだまだ多様な形で現れてくるであろう。

4. 認知文法論と認知意味論

認知文法と言えばLangackerの理論は欠かすことができない。Langacker(2015)を通して、認知文法の品詞観とそれにまつわる議論を整理しつつ、プロトタイプのみならず全ての成因に関して特徴づけが可能であるという。動詞がどのような意味を持ち、どのような形で言語化されるのか。構文文法や認知文法など様々な理論的枠組みから議論される。認知言語学と認知文法はよりよい科学的な研究の実りを期待できるのである。認知意味論と認知文法論の観点からの研究が目立つのは世界的な研究の流れの一つである。認知科学という学際的総合科学の観点からの認知言語学を見る必要があり、認知言語学と理論的基盤が重要である。認知言語学から見る文法観は記号としての文法、意味の手段としての文法、文法の仕組み、認知能力の反映としての文法などである。最近2年間の研究成果として現れるのは、認知文法概念形成からの言語分析、容器、イメージスキーマ、フレームの意味拡張、比喩、隠喩、換喩などの基本概念から始まっている。以下の論文を概観する。

- ・金光成(2017)「容器のイメージスキーマを基盤とする表現に関する考察―「名詞句+いっぱい」構文を中心に―」『日語日文学』75
- ・金光成(2018)『複合名詞の語形成に見られるメタファと再分析―名詞+倒れを事例に―』『日本文化研究』67
- ・金光成(2018)「量の副詞と共起する日本語複合動詞の特性に関する考察」『日語日文学』78
- ・金光成(2018)「複合動詞「名詞+づける」の語形成とその動機づけ:名詞部分が抽象的關係に属するケースを中心に」『日本語教育』85 ～かかる」「～かける」の意味」『日本語学研究』54 ・金秀珍(2018)「「たつ」の意味分析と意味拡張の様相―認知意味論の観点から―」『日語日文学』78
- ・Kim Kwang-sung (2017) 「Nじゃないですけど」 구문과 유사성의 인지과정 『日語日文学研究』101
- ・Lee Woo-je(2017) 일본어 타격동사 「うつ」 의 의미 확장에 관한 일고찰 『日語日文学研究』102
- ・Lee Jun-seo(2017) 「ride_vehicle」 프레임의 의미 확장에 관한 일고찰 『日語日文学研究』103
- ・楊曉敏(2018)「複合動詞の成り立ち及び意味拡張に見られる存在的メタファー」『日本語学研究』57

金光成「量の副詞と共起する日本語複合動詞の特性に関する考察」は量の副詞と共起する複合動詞の特性に関する研究である。認知プロセスと関連づけて研究されている。副詞のフレームや意味論的性質

を明らかにし、複合動詞の評価性を明らかにしていると同時に、量の副詞と複合動詞の共起関係を日本語学習の立場から扱っている点が目立つ。又、「容器のイメージスキーマを基盤とする表現に関する考察」、「複合名詞の語形成に見られるメタファーと再分析」、「複合動詞「名詞+づける」の語形成とその動機づけ」に関する認知言語学的方法は認知プロセスや評価性やフレームを応用しつつ行う方法と同様である。

朴龍徳「認知意味論から見る日本語の「~かかる」「~かける」の意味」は「かかる、かける」の研究は意味拡張（起点一経路一到達点）のスキーマ上、到達点に焦点があり、到達点への移動と関連づけた研究である。これらは移動の経路の概念が時間の方に写像され、変化の結果、達成の意味を潜在的に表している。さらにこれらと類似の研究である揚曉敏「複合動詞の成り立ち及び意味拡張に見られる存在的メタファー」は複合動詞の後項動詞に見られる存在的メタファーに関する研究であるが、学習者の理解を深めるために複合動詞の習得状況を改善し、日本語教育の現場に導入しようと試みている。そのほかにも認知意味論からの研究で意味分析や意味拡張やフレームに関する様相などが見られる。

又、金秀珍「「たつ」の意味分析と意味拡張」は認知意味論の観点から分析しており、Kim Kwang-sungの「Nじゃないですけど」は文の類似性と認知過程を明らかにしようとする。Lee Woo-jeは、日本語の打撃動詞「うつ」の意味拡張に関する研究で「打つ」という打撃動詞の意味拡張を調査した内容である。これとLeeJun-seo「ride_vehicle フレームの意味拡張に関する研究や揚曉敏「複合動詞の成り立ち及び意味拡張に見られる存在的メタファー」の二つは意味拡張に見られるメタファー存在の有無を明らかにしている。

このような認知的な観点は言語学な研究だけに適用されるものではなく、日本語学的観点や文法論的観点からも適用される。最近の認知的な関連の研究は言語学研究の流れであろう。世界の言語研究や外国語の研究の流れと同時に発展していくのが認知的な観点である。今後このような流行の研究の流れやスタンスをどのように発展させていくか、また外国語教育に応用出来るかが問題である。今後、更なる可能性の高い認知的な研究と人工知能のAIとの関連の進歩を期待してやまない。このような位置づけやスタンスを踏んで研究が重なり、日本語の文法研究にも多様化⁷⁾されている発表内容は、「認知文法から見る動詞と構文」「認知文法とフレーム意味論 - 品詞の有意義性をめぐって -」「認知文法の枠組みにおける日中対照研究の可能性 - 日中の二重主語構文を中心に -」「見えないセンターラインと空間認知表現」である。節の意味と構造は動詞が決定しているとする立場と、構文が決定しているとする立場があり、今なお様々な理論的枠組みにおいて盛んに議論されているが、動詞と構文は不可分の関係にあるという観点で行われている。認知文法における特徴的な議論のひとつに品詞の有意義性に関するものがある。認知文法の枠組みに基づき、日本語と中国語の二重主語構文に関する対照研究が行われている。指示代名詞の意味的多様性、特に、implicitに想定されるlandmarkの複雑性ということについて英語などの言語をモデルとした直示表現の分析である。認知文法研究会⁸⁾の発表内容は以下の通りである。「認知文法における品詞観」「認知文法と動詞意味論研究—理論間の生産的な議論に向けて—」「認知言語学と失語症」「なぜ言語構造は主語と述部に分かれるのか？ミラーニューロンによる解明」である。これらは韓国での認知文法や認知言語学の研究と通じることではあるが、認知言語学と失語症との関連性を結びつけるのが一層進んだ研究であると言えるが、韓国の日本語関連雑誌にはこういう論文はまだ見当たらない。研究を概観すると認知文法から見る動詞、構文、フレーム意味論、センターライ

7) 2017年3月15日、日本の認知文法研究会の発表会で行われた発表内容である。

8) 2018年3月17日、日本の認知文法研究会の発表会で行われた発表内容である。

ン、空間認知表現、節の意味と構造、など様々な観点から認知文法と関連のある理論的枠組みを中心に議論されていることが分かる。認知文法の研究は動詞と構文との関係は不可分の関係にあるのである。さらにそれを応用する有意性を明らかにし、外国語である韓国語や中国語などの対照の可能性を明らかにしている。又、指示代名詞の意味的多様性のimplicitに想定されるlandmarkの複雑性というモデルとした直示表現の分析などをはじめ名詞と動詞を含む理論的研究から認知言語学の実用性まで広がっていく可能性の高い分野である。

5. 記述的文法研究

文法研究には様々な意見や様々な目的がある。基本文法（学校文法）である橋本文法だと言える。話者が従うべき文法の規範のことであり、文法的に正しいか正しくないかを判断する。この正しさを判断する基準となる文法を規範文法と呼ぶ。最近の新しい観点として教育文法に関心が高いことが挙げられる。教育文法は外国人に対する実用的な文法と言える。これらを最初に作り出した研究者は寺村(1982)と言っているようである。記述的な文法研究を正しく理解するには次の指摘が示唆的である。規範文法（学校文法）は、ある言語の話者が従うべき文法の規範のことであり、文法的に正しいか正しくないかを判断するものであり、記述的文法は、現代の言語学では規範的ではなく記述的であり、実際に使われる言語を調べて法則性を見出す科学なのである。記述的文法は語と文を中心に考察する必要がある。その一例として1980年代から記述的日本語文法研究をリードしてきた仁田義雄の研究があげられる。仁田『日本語文法の記述的研究を求めて』では記述文法について広い視野から論じている。主に文法と文法分析・文法記述をめぐって論じており、文の意味として文の意味的構造と統語構造を明らかにしている。さらに語と主語との関係、複文との関係、文を超える領域として「文の文法」から「文を超える文法」への究明を明らかにしている。

5.1 語と関係のある記述的文法研究

語と関係のある記述的文法研究のカテゴリーをどこまで広げばいいか判断が難しいが、以下のように語の範疇に入るものを含むことにする。「接続助詞、品詞、モダリティ、タツ、つける、なら、かもしれない、ようだ、そうだ、ノダ」など様々である。

- ・Takahashi Miho(2018)「と思う」の用法に関する記述的研究 -名詞述語文を中心に- 『日語日文学研究』 107
- ・井口有子(2018)「接続助詞シの意味について」 『日本言語文化』 43
- ・Yasukochi Akiko (2017) 「VNする」형 자타양용동사의 자타교체의 가능성-타동성의 관점에서- 『日語日文学研究』 100
- ・李廷玉(2018) 「すぐ」と「すぐに」の文法的・意味的記述 『日本語教育』 85
- ・杜英任(2017)「広告コピーでの指示詞について一ソ系の指示詞を中心に」 『日本言語文化』 41
- ・金慶惠(2017)「日本語の条件表現形態「なら」に関して一文法的位置づけと構文から現れる特性を中心に」 『日本語学研究』 54
- ・Park, Jung-Geun(2018)「現代日本論説に現れる文末「のだ」に関する研究」 『日本語文学』 78

- ・Kim Bong-jung(2018) 「시간을 나타내는 접속 표현 「동사+うちに」 의 특징에 관하여」 『日語日文学研究』 104
- ・Seol Genu-soo(2017) 「이동동사의 연구 - 「연어와 관용구와의 관계」 를 중심으로-」 『日語日文学研究』 100

以上のように名詞述語文の記述的研究を行っているのが、Takahashi「と思う」の用法に関する記述的研究である。名詞述語文の中で「と思う」がどのような働きをしているのかを究明する研究である。井口は接続助詞シの意味を記述し、杜英任は広告コピーでのソ系列指示詞を中心に述べている。金慶惠の条件表現形態「なら」、Parkの論説文に現れている文末「のだ」の究明、Kimの時間を表す接続表現「동사+うちに」、Yasukochiの「VNする」に関する自他動詞交代の可能性である。李廷玉「「すぐ」と「すぐに」の文法的・意味的記述」も同様である。これらは語（句）と関わりのある内容を文法研究の典型的な方法で記述している。金慶惠「日本語の条件表現形態「なら」の文法的特性」やPark、Jung-Geun「現代日本論説に現れる文末「のだ」に関する研究」やKim Bong-jung「시간을 나타내는 접속 표현 「동사+うちに」 의 특징에 관하여」やSeolの連語と慣用句の関わりを究明するための移動動詞の研究などは語と関連させている記述的研究である。

上の内容と同じように日本での文法研究も見られる。日本の文法研究を代表として行っている日本語文法学会の論文を調べてみると『日本語文法』（17巻1号(2017年3月)中、重要な論文には以下のようなものが見られる。「形容詞連用形の「内面的用法」について、再帰構文における受動化の成立条件、制限的連体修飾節のタイプ分け、現代語における時間を表すヲ格について、複合助詞ノヲにおける格助詞用法と接続助詞用法の連続性について、琉球宮古方言の終止連体形、動作主認識の副詞的成分についての一考察」などは語の記述的研究と文の研究がまたがっている研究が多い。韓国での記述的研究や日本での記述的研究は内容は異なっても取り扱っている範疇は類似していることが分かる。

5.2 文と関係のある記述的文法研究

記述的な文法研究は多様な観点から行われており、文と関わりのある研究の一部の例として紹介する。記述的な文法研究は授受動詞構文、可能表現、複文構成て節、主観性と間接性、文末の「のだ」、属性叙述文、非情物主語、動詞の限界性などである。これら記述的な文法研究は、現在の日本の現場での研究タイトルと類似しており、「基本」「原理」「変化」「抽象」などと深い関係がある。これからの文法の研究は昔の研究と類似してはいるが、研究内容が実用的な面では異なる記述的な研究が活発になるであろう。日本の日本語文法学会での(『日本語文法』17巻2号、2017年9月)は特集として「文法性判断に基づく研究の可能性、容認可能性と言語理論の説明対象、日本語史研究と文法性判断、文法研究におけるデータについて一文法研究は経験科学たりうるか」を扱っている。ここからも分かるように言語理論や文法性やデータの活用は記述的文法研究の新しい研究の可能性を指摘するものである。さらに具体的記述的文法研究を確実に表した研究論文として「三種類の逆使役と様態・結果の相補性」、「カキ料理構文における「XのZ」の意味的關係」、「書き言葉におけるワケダ使用の必然性について」、「イベント名詞句からの抜き出しと前提性」、「日本語と韓国語のアスペクト体系に関する一考察」表している。これらのテーマは伝統的に研究されてきた研究テーマ(逆使役と様態・結果、XのZの意味的關係、ワケダ、名詞句、日韓語のアスペクト体系)と同様である。

- ・ 송혜선(2017) 「사물을 목적어로 취하는 타동사의 수수성과 보이스성」 『日語日文学研究』 103
- ・ 金殷模(2018) 「てある」構文における多様化の原因」 『日本言語文化』 38
- ・ Li Dong-zhe(2017) 「언어의 변화와 용법에 관한 일고찰—“知れる”의 용법을 의미를 중심으로」
- ・ Kim Bong-jung(2017) 「見られる」유정물주어 수동문 -수동문의 구조와 구문적, 의미적 성질과의 관련성에 주목하여- 『日語日文学研究』 101
- ・ Sakaguchi Sayaka(2017) 콘ナ류에 있어서 감정·평가성 재고찰 『日語日文学研究』 101
- ・ Bahng, Yoon-hyung (2017) 「동사에 접속하는 “모노다(ものだ)”의 의미와 기능 -의미와 기능의 파생 관계를 중심으로-」 『日語日文学研究』 102
- ・ 魚住泰子(2018) 『現代日本語の存在文「XにYがある」にに関する一考察—時間的限定性を中心に—』 43 『日本語教育研究』
- ・ 崔瑞暎(2018) 「現代日本語の属性叙述文—人主語の文を中心に—」 『日本語文学』 78
- ・ 崔瑞暎(2017) 「人主語の他動詞文と非情物主語の他動詞文」 『日本語文学』 75
- ・ 鄭相哲(2018) 「反語文の情報構造について」 『日本語文学』 76
- ・ 睦宗均 (2018) 「進展性動詞(gradual verbs)の限界」 『日本語文学』 76
- ・ 小松奈々(2018) 「複文を構成するテ節が表す同時性」 『日本学報』 114
- ・ 權謹玲(2018) 「日本語に見られる主観性 間主観性の一考察」 『日本学報』 115
- ・ Kim, So Eun(2018) 「知覚動詞の可能表現の`状態性`に関する研究」 『日本学報』 116
- ・ 河在必(2017) 『現代日本語における脱動詞化にともなう言語変化をめぐって—「すれば」「すると」「しても」の形式を中心に—』 39 『日本語教育研究』
- ・ 河在必(2018) 『現代日本語の動詞条件形及び中止形の脱動詞化に関する記述的研究—一視覚活動を表す動詞「みる」の「みれば」「みて」の形の場合—』 44 『日本語教育研究』
- ・ 朴京愛(2018) 『日本語の希望決意を表す表現に関する考察—「~しようと思う」と「~たいと思う」を中心に—』 日本語教育研究43
- ・ 吉田玲子(2018) 『モノを主語にとる名詞述語文—時間的限定性を基準として—』 61 日本文化研究
- ・ Yasukochi Akiko(2018) 「일본어 유대동사의 자타교체의 가능성-타동성의 관점에서-」 『日語日文学研究』 104
- ・ Bahng Yoon-hyung (2018) 「동사에 접속하는 “고토다(ことだ)”의 의미와 기능 - 의미와 기능의 파생 관계를 중심으로 -」 『日語日文学研究』 106
- ・ 草野達也(2018) 「「名詞ナ名詞」における形態的統語的考察」 『日本学報』 117

言語研究や文法研究の基礎となる文と関連のある研究は今も数多く存在している。송혜선の場合はやりもらいをボイスの観点と結び付けて扱っている。金殷模は「てある」構文における多様化の原因は何なのかを明らかにしている。Li Dong-zheとKim Bong-jungは「知れる」と「見られる」に表れる多様性について文法と関連づけている。Sakaguchi Sayakaはコンナ類の感情と評価性を文法的観点から行っている。Bahng, Yoon-hyung 「ものだ、ことだ」、魚住泰子の存在文「XにYがある」、崔瑞暎の属性叙述文、他動詞文、鄭相哲「反語文、睦宗均の「進展性動詞、小松奈々の「複文、權謹玲の主観性、Kim, So Eunの`状態性`、河在必の脱動詞化、朴京愛の希望決意表現、吉田玲子の名詞述語文、Yasukochi Akikoの타동성、「見られる」、草野達也「「名詞ナ名詞」文などは文と関連づけて行っている典型的な記述的文法研究である。以上のように文に関する記述的文法研究は昔の研究と変わらないように見える

が、一層進んだ研究方法や内容である。やりもらい構文、複文、主観性と間接性、属性叙述文、動詞の限界性、派生関係から見た「ものだ、ことだ」、存在文、他動詞文、反語文、進展性動詞、状態性、脱動詞化、希望決意、名詞述語文、「名詞ナ名詞」文などの多様性と具体性を文と関連づけて研究しており、時代の研究の流れにそって洗練された研究である。ここでいう記述的文法研究は理論的研究と相互関連性がある。理論的な研究という時の「理論」については立場や観点によって異なる場合が多い。理論は研究において均衡の取れた総合的な視野を提供し、さらに直感的または感覚的な結論を回避して論理的な説明を行うことが可能である。これは研究調査を行う上で大きな指針である。加えて現在の学術研究のほとんどが何らかの基礎的な理論に基づいたものであり、先進的な研究を理解する上で理論は学問の世界にとってもはや不可欠の存在である。多くの研究者が上記のような「記述的研究」と「理論的な研究」とが対立するものではなく相互補完的な関係にあるものである、という認識を持っている。

ところが学説を元にしていない詞辞の研究や品詞性の関わる研究や、生成文法の立場から論じられている論文はほとんど見られない。盛んに見られるのは文法化の観点から考察や認知言語学や認知文法論の論考であり⁹⁾、日本で行われている研究のスタイルとあまり変わらないのが現状である。次に多様な研究を利用した文法研究について検討する。

6. 日本語教育への応用と文法研究

外国人における日本語文法研究においては日本語教育への応用が重要となる。実際に多くの研究で直接的にも間接的にも日本語教育に関わる研究が多い。それらを中心に検討する。

- ・ 杉村泰(2018) 「二者会話場面における日本語の「この」「その」「あの」の選択: 日本語話者と韓国人上級日本語学習者の比較」 『日本語教育』 82
- ・ 井ノ上佐織(2018) 「韓国人上級日本語学習者の作文における結束性の考察」 『日本語教育』 83
- ・ Seyama Midori(2018)3 「인칭 지시표현의 선택에 관한 일고찰-대명사의 분별사용을 중심으로」 - 『日語日文学研究』 106
- ・ 金祉諤(2017) 「韓国人日本語学習者の動詞の意味のプロトタイプの考察: 「伝える」、「投げる」、「忘る」の場合」 『日本語教育』 79
- ・ 李忠奎 (2018) 「韓国人中級学習者のための日本語の複合動詞」 『日本語教育』 82
- ・ 崔延朱(2018) 「日本語の仮定・条件表現習得の普遍性と特殊性に関する研究」 『日本語教育』 82
- ・ 渡辺美知子(2017) 「高等学校の日本語教科書に見られる意思疎通機能の分析: 2009改定教育課程の教科書「日本語 I」を中心に」 『日本語教育』 80
- ・ 李暲洙(2017) 「2015改訂日本語教育課程と意思疎通基本表現: 2009改訂日本語教育課程との対照」 『日本語教育』 78
- ・ Cho Young-nam(2017) 「「教室日本語」の特徴と談話構造 -カナダの大学の日本語教育の現場から-」 『日語日文学研究』 103

以上のように日本語教育への応用と文法研究は主に学習者と教科書に見られる意思疎通機能に関する

9) 2、3番目の論文は対照研究にも属するであろう。他も同様である。

研究が目立つ。その中で名古屋大学の杉村泰は韓国人、中国人の上級日本語学習者の例から「この」「その」「あの」の選択について分析を行っている。これと類似したSeyama Midoriの代名詞の使い分けで人称指示表現の選択に関する研究もある。又、井ノ上佐織「韓国人上級日本語学習者の作文における結束性の考察」は作文に見られる結束性の考察の研究である。崔延朱「日本語の仮定・条件表現習得の普遍性と特殊性に関する研究」と金祉諱「韓国人日本語学習者の動詞の意味のプロトタイプの考察「伝える」、「投げる」、「忘れる」の場合」は学習者の立場から考えた研究であるので実際の日本語教育に応用できるであろう。又、文法のカテゴリーには入っているが、まだ教育に活用されていない複合動詞を扱っている研究がある。李忠奎「韓国人中級学習者のための日本語の複合動詞」は複合動詞を日本語教育に取り入れたいという新しい観点からの研究である。また渡辺美知子、李暲洙は教育課程や日本語教科書に見られる意思疏通基本表現を中心に分析を行っている。以上のように外国人による日本語文法研究は日本語教育とのつながりは望ましい研究である。これからはより幅広く研究が広がっていくであろう。

7. コーパスを活用した研究

コーパスを活用した研究はデータの蓄積から得られる新しい研究の領域である。これは多様な材料から共通的な現象を得ることができ、実際の日本語教育と関連のある膨大なデータを活用し、文法研究の活性化や研究の変化を持たせる試みである。対照研究、コーパス研究に日本語教育などを取り入れれば一般化でき、多様な用例の検索の容易性を利用すれば成果が上がるであろう。これまで研究内容のスタイルも変化してきている。事実から積み上げるコーパス研究は最近の研究スタイルから得られる結果も多い。最近の研究の傾向として課題が先行する研究が増えているが、過去と同様に問題設定や列挙など研究方法にはそれほど変化がない。今後は文法の新しい研究にまで着目することは少なくなる可能性があるが、用例から結論を出す研究であるコーパス研究の内容を見直す必要がある。

- ・李惠正(2017)「日本語授受表現における動詞コロケーションの意味類型について：大規模コーパスを用いて」『日本語教育』81
- ・李忠奎(2017)「韓国人のための複合動詞データベース—現状報告と有効性の検討—」『日本語文学』75
- ・박선주(2018)「코퍼스를 이용한 일본어 어휘학습의 제안: 「~的」가 붙는 어기의 요소를 중심으로」『日本語教育』85
- ・Li Dongzhe(2018)「코퍼스의 용례로 본 “을氣付く”의 용법에 대하여 -“을氣付く”의 타동사 용법을 중심으로-」『日語日文学研究』105
- ・小松奈々(2017)「意見交換会話における談話能力の向上を目指した会話授業-指導項目案と会話データを用いた授業の実践報告-」『日本語教育研究』38
- ・趙南星(2018)「日本人大学生の複合動詞使用に関するアンケート調査分析—込む、切るの学習語彙選定を目指して—」『日本文化学報』77

以上のように李惠正「日本語授受表現における動詞コロケーションの意味類型について:大規模コーパスを用いて」と李忠奎「韓国人のための複合動詞データベース—現状報告と有効性の検討—」はデー

データベースであるコーパスを活用して行われている。박선주「コーパスを活用した日本語の語彙学習の提案：「~的」がついている語基の要素を中心に」とLi Dongzheの研究はコーパスを利用してデータを分析している。統計的な内容からデータの内包している重要な文脈を応用し活用しているのである。その分野も「~的」や「を氣付く」の用法などいろいろな要素から抜粋できるのである。

コーパスではないが多くのデータを活用している研究も絶えず行われている。小松奈々「意見交換会話における談話能力の向上を目指した会話授業-指導項目案と会話データを用いた授業の実践報告-」と趙南星「日本人大学生の複合動詞使用に関するアンケート調査分析-込む、切るの学習語彙選定を目指して-」は会話データやアンケート調査にもコーパスのような多くの資料を活用している。

以上のようにデータの活用は既存の研究に新しい研究の領域を付け加えることができる。ここで重要なのはデータを統計的で量的な資料だけをそのまま使うのではなく、そこから得られた研究内容を十分に活用すればよりよい結果が得られるということである。実際の日本語教育と関連のある膨大なデータを活用した上での文法研究の活性化が望まれる。

8. 文法研究の中の敬語と談話

韓国と日本は敬語の使い方が類似しているが、異なるところも非常に多いため、研究の重要なテーマになり得ている。韓国語は年上の者に必ず敬語を使わなければならないという絶対敬語、日本語は相手によって異なる敬語を使う相対敬語と言われている。この敬語の延長線から考えると談話も同様である。時代の変化により敬語の研究の多様性は評価と関連づけて研究が行われている。敬語と談話を文法というカテゴリーから離れて扱っているものもあるが、ここでは文法の中の敬語と談話だけを取り出して扱う。

- ・ 김용각 「일본인의 「~させていただく」 사용실태에 관한 고찰」 『日本語教育』 82
- ・ Lee Hyeon-jin (2018) 「『国会會議録檢索システム』における参議院と衆議院の「させていただく」の使用実体について」 『日語日文学研究』 107
- ・ Kim Dong-kyu (2017) 「내용에서 본 일본 회사의 경어표현 사용 문제-일본어교육에의 적용을 목표로-」 『日語日文学研究』 100
- ・ Min Seung-hee (2018) 「わたくしとわたし에 관한 비교 고찰」 『日語日文学研究』 107
- ・ Kim Su-kyoung (2018) 「테크렐의 마이뉴스 대우화에 관한 일고찰 -비은혜 표현을 중심으로-」 『日語日文学研究』 105
- ・ 都基禎(2017)「宇治拾遺物語」の敬語研究—中世語「申す」の待遇性を中心に—『日本文化研究』 72
- ・ 金光泰(外)(2018)「推日約束取消し行為の談話構造及び談話ストラテジー」『日本言語文化』 43
- ・ 橋谷萌賀(2018)「ポライトネスの観点から見る関西方言話者のLINEにおける言語行動」『日本学報』 117
- ・ Cha So-young, Lee Eun-mi (2017) 「대학생 친구 간 대화에 나타난 「네」의 담화상의 기능 - 성차 요인을 중심으로 -」 『日語日文学研究』 100
- ・ Cho Young-nam (2017) 「『教室日本語』の特徴と談話構造 -カナダの大學の日本語教育の現場から-」 『日語日文学研究』 103

以上のように敬語と談話を扱っている研究は多く、敬語は実用的な内容が目立つ。実用的な敬語からみると김용각「日本人の「~させていただく」の使用実体に関する考察」はビジネス世界でよく使われている表現であり、Lee Hyeon-jinは日本の参議院と衆議院で使う「させていただく」の使用実態を明らかにしている。どちらも丁寧なビジネスの場や公式的な場での使用例である。Kim Dong-kyuは内容から見る日本会社員の敬語表現の問題を日本語教育の現場において扱いたいという主旨の論文である。Min Seung-hee は「わたくしとわたし」の対照研究を、Kim Su-kyoung(2018)は'テクレル'のマイナス評価の待遇化について非恩恵の表現を中心に研究している。また都基禎は中世語「申す」の待遇性を研究している。

談話では、金光泰(外)「推日約束取消し行為の談話構造及び談話ストラテジー」は約束の取消しの行為を談話構造と談話ストラテジーから考察した研究で、外国人の日本語学習者や研究者にも有用な研究である。またCha So-young, Lee Eun-mi(2017)は大学生の友だちの間に現れている「ね」の談話上の機能を男女の要因を明らかにしている。橋谷萌賀「ポライトネスの観点から見る関西方言話者のLINEにおける言語行動」はLINEで関西方言話者の言語行動を調査したものである。中でも注目すべき論文はCho Young-namの教室日本語の特徴と談話構造に関する研究で、カナダの大学の日本語教育の現場から調査した研究である。

このように教育の現場や社会生活での場面やビジネス場面などで多様な敬語と談話が取り扱われている。これからの研究の方向性は敬語と談話の場合、実用的な内容の研究が目立っていくであろう。

9. 多様な研究

伝統的な文法研究は文成立論をはじめ、中核的なカテゴリーに注目し議論されてきた。これからの研究の方向性は決まったカテゴリーやパターンではなく多様な角度から研究が進んでいくだろうと思う。これは海外での研究の流れなのかははっきりしないが、あるカテゴリーにこだわらず多様な研究パターンが見られるようになった。例えば中心的な現象から社会的影響へ、理論から実用へ、周辺の現象へ、談話行動、語法的な研究など多様な研究の可能性が窺える。

- ・梁乃允(2018)「日本語中間言語のノダの特性に関する研究」『日本語学研究』56
- ・睦宗均 堤良一(2018)「第2言語習得と普遍文法の利用可能性」『日本学報』115
- ・尹相實 李芝賢(2017)「日本語の文末省略文の統合方法的研究—日常会話文と広告文の比較分析を通じて—」『日本言語文化』40
- ・小松奈々(2018)「意見陳述語の終結部における会話参加の様相」『日本学報』115
- ・ウィモンサラウォンアパボン 中井揚子(2017)「誘いの会話における言いさし発話の分析—日本語母語話者によるロールプレイをもとに—」『日本語教育研究』40
- ・김창남(2017)「日本語」の「~しぎます」と「~すぎです」の使用実体『日本文化研究』74
- ・八木健太郎(2018)「換喩から見た連用形名詞の主体用法」『日本語教育』82
- ・Doo Yeong-im(2017)「광고카피의 지시사에 대하여-코계열의 지시사를 중심으로-」『日語日文学研究』100
- ・金良宣(2018)「会話体での日本語idiomの特性」『日本語学研究』55

- ・金俸呈(2018)「時間表現「名詞＋うちに」を含む構文的意味的な性質」『日本語文学』80
- ・任ゼヒ(2018)「大稱時詞のバリエーションをめぐる研究の現状と展望—複文化複言語を射程に入れた日本語教育からのアプローチ—」『日語日文学』80
- ・李廷玉 (2017)「最上級の程度副詞「一番」の一考察」『日本語教育』79
- ・전자연(2017)「否定におけるとりたて副詞の機能—「特に」と「別に」の分析—」『日本語教育研究』41
- ・김영심(2017)「日本語の助詞「の」に関する一考察—意味的格助詞の機能を中心に—」『日本学報』111
- ・金光成(2017)「語彙の用法と意味領域の相関に関する一考察: ウェブコーパスとしての『発言小町』の例示を中心に」『日本語教育』78
- ・Dong, So-hyun (2017)「광고언어의 진술성에 대해서-일반회화문과의 대조를 통해-」『日語日文学研究』102
- ・尹榮珉(2017)「日本学校文法の成立過程考察—品詞名と分類の体系を中心に—」『日本語学研究』64
- ・尹榮珉(2017)「近現代日本文法書に用いられた「文法」—「文法」の概念と定義」『日本言語文化』40
- ・이덕배 (2017)「明治 20년대 落語의 2인칭대명사」『日本語教育』78
- ・Togasali Yuichi (2017)《조선어역》일본어문에 보이는 호선부호에 대하여『日語日文学研究』101
- ・Kim Pyung-gang(2017)「실정시대(室町時代)일본어 존재표현의 양상 -연체수식표현을 중심으로-」『日語日文学研究』102

以上から分かるように今までのカテゴリーに入れてもかまわないが、別に扱うことによって研究の多様化を見出すことができると思う。その研究の主なテーマは日本語中間言語のノダの特性、第2言語習得と普遍文法、広告から見る文末省略文、意見陳述語の会話参加、誘いの言いさし発話、「ます、です」の使用実体、換喩から見る名詞、広告コピーのコソアド、日本語idiomの特性、構文的意味的な性質、複文化複言語を射程に入れた日本語教育、程度副詞「一番」、否定におけるとりたて副詞、意味的格助詞の機能、語彙の用法と意味領域の相関、広告言語の陳述性、学校文法の成立過程、「文法」の概念と定義、明治20年代の落語の2人称代名詞、交戦 室町時代存在表現、など多様である。先行研究の内容から少し方向性を変えた研究が多い。今後もこのように研究の多様性が見られるであろう。研究の範囲が広く多様であるというのはよい傾向である。現代文法研究の多様性は韓国の日本語教育にもよい影響を与えるだろう。社会言語学的な研究や日本語教育や談話分析の観点からの研究の中でも文法的研究の領域はあると思うが、それを細分化してみると意外に文法的要素が多い。これまで研究者の関心が高かった領域であるテンス、アスペクト、モダリティ、やりもらい、受け身、使役など文法の中心的な現象から周辺的研究に移行している傾向が見られ、それは研究の環境が変わってきていることを示している。このように文法研究が多様化されるのは望ましい現象である。研究方法やスタイルの変化は言語そのものから応用言語へと変わる研究の多様化であり、新しい可能性とも言える。

10. 日本の学会に見られる研究

10.1 日本語文法学会の日本語文法の動向

2018年日本語文法学会『日本語文法』18巻2号の特集である「日本語文法研究と教育との接点¹⁰⁾」が話題になっている。その特集は「日本語文法研究と教育との接点」と「新しい学説はどのように古典文法教育に貢献するのか」で、ムム・ムムズの違和感を言語類型の変化、テンス・アスペクト・モダリティ体系の変遷から説明するものであり、新しい学説はどのように外国語教育に貢献するのかという内容である。特にモダリティ・心的態度・間接発話行為の日英の違いを言語使用の三層モデルから説明している。「日本語教育においてどのように新しい日本語文法研究を創出するか」は言語の4機能の「聞く」「話す」「読む」「書く」ための文法の開拓の必要性を述べている。また「言語教育と文法研究との接点」では非流ちょう性の研究から発話産出メカニズムの理論へ発展していくと述べている。研究論文として日本では今も重要視されているのは古典文法と現代語との関わりについての内容である。古典文法と現代文法との関連は現代語研究にも非常に役に立つ。これは文法化されていく過程を明らかにする一助となる。その分野においては「現代日本語共通語における終助詞ガ、ダ」、「近世を中心とした受身文の歴史」、「文の階層構造からみたモノの周回の用法の分類」、「「する」の性質に基づく「形容詞ク形+する」の分析」などの検討がある。

2018年8月10日早稲田大学で日本語文法学会主催、早稲田大学総合人文科学研究センター共催の公開フォーラム「国語教育と文法」が開催された。新しい学習指導要領では「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」といった枠組みから、国語教育の在り方が再編されているという内容であった。日本での日本語文法研究の方向が少し変化しているように見受けられる。それは今までと違う試みとして文法教育の在り方を共に考える企画である。これからの日本の小中学校の国語科の文法教育、文法教育の現状と課題、名詞から考える文法教育、古典教育と古典文法、文法教育と「深い学び」ということについての公開フォーラムを見ると日本人と外国人の日本語の文法の学習をいかに効果的に進めていくかについての新しい試みは日本語文法学会の望ましい変身といえ、研究の成果も多いであろう。

10.2 日本語学会の日本語文法の動向

日本の日本語学会は日本語研究の進展を願い、1994年「国語学会」として設立され、2004年1月「日本語学会」に改称した。学術雑誌の名称も「国語学」から「日本語の研究」と変更している。日本の日本語学会でも現代日本語の文法の論文は多くないが、特集として2016年～2017年における日本語学界の展望が扱われている。それも文法(史的・研究)と文法(理論・現代)に分け内容をまとめている程度である。書評は村上佳恵の『感情形容詞の用法—現代日本語における使用実態—』があり、『日本語の研究』第14巻2号では日本語文法の論文は見られないが、7編の論文中1編ほどで、小特集として「越境する日本語研究」がある。これは広島大学の白川博之の日本語研究から日本語教育研究への越境について述べて

10) 2018年日本語文法学会『日本語文法』18巻2号の特集として「日本語文法研究と教育との接点」を取り上げている。この研究より先に「文法、談話の研究と日本語教育を結びつける」という課題に挑んだ15人の研究者による研究成果(くろしお、2015)もあった。ここでは補助動詞テオク、産出のための文法、従属節の共起、引用句、文末のムード形式とポライトネス、格助詞から接続詞への拡張、非文末「ですね」、「ね」の使用と「ね」、モダリティとエビデンスシャリティ、文末表現、文章構造分析、日本語学習者の意見文、文末表現、文のタイプ、逆接の接続詞、日本語の教育と研究の間がある。

いる。さらに『日本語の研究』第14巻1号でも現代語日本語文法はないが、書評として早津恵美子『現代日本語の使役文』がある。『日本語の研究』第13巻4号では5編中2編でその一つが「接続助詞の前接語に見られる品詞の偏り—コーパスから見える南モデル—」や「レッテル貼り文という文」である。この論文集には定延利之の書評『コミュニケーションへの言語的接近』もある。日本語学会『日本語の研究』2017年第13巻3号では「文末形式「模様だ」の成立と展開」、「短縮語の形成方略に観察される世代差について」、「短縮外来語とその選好傾向」がある。また日本語学会『日本語の研究』2017年第13巻2号では2編中1編で、タイトルは「スケール構造を用いた程度修飾・数量修飾の分析—「ほど」「分」を対象として—」である。2017年1月1日発行『日本語の研究』第13巻1号では3編中、現代日本語文法に関する論文はなく書評の宮岡伯人『「語」とはなにか・再考—日本語文法と「文字の陥穽おとしあな」—』が一つある程度である。日本語学会において現代日本語の文法が多くないことは昔からよく知られている事実である。しかし、ここに紹介されている論文は現代日本語文法の新しい展望と新しい可能性の知らせでもある。広島大学の白川博之の日本語研究から日本語教育研究への越境、早津恵美子の現代日本語の使役文、接続助詞の前接語に見られる品詞の偏り、コミュニケーションへの言語的接近、文末形式「模様だ」の成立と展開、短縮語の形成方略に観察される世代差、短縮外来語とその選好傾向、「スケール構造を用いた程度修飾・数量修飾の分析「語」とはなにか、などの論文や書評は面白いとされている研究である。

以上のように伝統を重視する日本語学会において現代日本語の文法が多くない論文の中に紹介されていることは、研究の頂点として、また方向性の暗示として判断されているという点で重要である。

10.3 言語学会の日本語文法の動向

日本での日本語文法研究学会の一つである日本言語学会(157回大会～154回大会)について概略を記す。157回大会は京都大学で80周年記念特別公開シンポジウム「新村出初代会長から80年--言語学はいま?そしてこれから?」を行った。初代会長は日本の言語学者、新村出であったが日本言語学会の礎を築き、言語研究の質的向上、量的拡大に尽くしたという。これまで言語研究は多彩な展開を遂げている。このシンポジウムでは、言語学の3つの中心的分野について今日までの研究状況、今後の展望について報告及び討議が行われた。

日本語文法と直接関係のあるテーマを扱った日本言語学会第156回大会は東京大学(2018年)で行われ、日本言語学会80周年記念シンポジウムで「日本のヴォイス研究の80年の成果と展望」というテーマをめぐって発表がなされた。その表題は「そもそもヴォイスとは何か?」、「日本語の受身の受身らしさと特殊性」、「日本語の受身の特殊性は日本語の他の特徴とどのように関係しているか?」で、ヴォイス現象を世界的な視野で長年研究してきた日本を代表する3人の言語学者の発表が行われた。テーマは「文法関係とヴォイス:オーストロネシア諸語の状況」、「中国語のヴォイス ～サセル、ナラセル、ナラサレル～」、「ヴォイスの拡張、言語および言語学における」である。ここに韓国人の研究者がいなかったのは残念なことである。

立命館大学(2017年)で行われた日本言語学会第155回大会の公開シンポジウムのタイトルは「理論言語学が解き明かす主観性と視点」であった。「視点投射から見たロゴフォリック階層」、「韓国語と日本語のモーダル疑問文における視点の切り替え」、国立国語研究所の共同発表(田窪行則、山田真寛)ではモーダル質問文で可能な単純可能性と不可能な前提の質問が存在を明らかにしている。「意志」「認識」という観点から「はすだ、かもしれない、can could may must might」は韓国語の未来標識-i

kes-i-は認知的用法では疑問文では使われず-ikesi-以外の未来標識を使用しなければならないという結論を韓日語の対照的観点から分析している。

以上のように多様な研究は言語の過程や成果があるため過去から新たに見る言葉の再発見はこれからも多々あることであろう。文法的カテゴリー、社会的要素、文化的特徴、機能などから文法研究の方向性は変わっていくのであるが、言語の構造を再発見することは言語の構造を明らかにすることにつながり、新しい研究の可能性が広がるであろう。

11. 国際的な研究の流れ

韓国での日本語学の研究もグローバル化時代を象徴して韓国語以外の研究や外国人の研究も見られるようになった。韓国の日本語学関連雑誌『日本学報』に載っている日本語関連論文に英語で書かれた論文もある。

- ・ KAGA Nobuhiro(2017) 「Japanese Double Nominative Constructions Revisited」 『日本学報』 113
- ・ Han Joung-Youn(2018) 「Agent Marking in Japanese Passive Sentences」 『日本学報』 116

KAGAとHanの論文は二重主格構造構文再考と日本語受動文における行為者マーキングに関する研究で、言語学の流れに沿って書かれた論文である。日本の言語学会の論文と日本語教育学会の論文は国際的にもよく引用されている。日本の日本語教育学会での日本語文法の動向を見るため、日本で学会の数が最も多く国際的にもよく知られている日本語教育学会『日本語教育』から日本語の文法と関連性のある論文を調べた。多くの論文が現場での日本語教育をテーマとしているが、日本語文法と関連のある論文はそれほど多くはない。171号(2018.12)には宮口徹也「『いい人そうだ』の分析—統語的・意味的観点から—」がある。本格的な日本語文法ではないが、文法的要素を取り入れて日本語教育に応用する論文はいくつか見られる。例えば「理工系学習者への「テイク」の用法提示について—『理工学系話し言葉コーパス』と日本語教材の調査から—」「グローバルMOOCsの相互評価における継続参加」「ヒンディー語を母語とする日本語学習者における対のある自他動詞の習得について—助詞選択と述語選択に関する誤用を中心に—」「話題開始のための談話標識の分類」「取り立て」再考、「文・節の連接からみた接続辞「ものの」の使用文脈の特徴」「多義動詞を中心語とするコロケーションの習得」「日本語学習者の「名詞+動詞」コロケーションの使用と日本語能力との関係—」「YNU書き言葉コーパス」の分析を通して—」「調査報告としては「上級日本語学習者の談話における「は」と「が」の知識と運用—未出か既出かによる使い分けに着目して—」などの論文が見られる。このように日本語教育に関する論文では日本語学的な面がある論文も存在している。文法研究と言っても日本語教育学的な要素も多く含意されているのだ。

以上から考察するに、理科系や人文系や商業系などの研究にも役立つようにするためには、新しい専門領域を越えるMooksやAIを応用すれば新たなステージでの文法研究の可能性が生まれるだろう。

12. 日本語文法研究の意義及び提言

過去2年(2017~2018)の間、韓国で行われた文法研究について学術誌を対象に検討する。すべての研究に言及するのではなく、大きな傾向を中心とする。日本語文法の研究は大きな変化はないが、時代の変化に伴い少しずつ変わる傾向が現れた。韓国で対照研究と記述的研究は今もそれほど変わらず多くの論文が発表されているが、その他にコーパス、認知文法、認知言語学を応用する論文が多くなってきている。2000年以降に発表された論文は日本語教育の活性化と共に、対照研究の重要性と必要性が再認識されているため、関心が高まっていることが分かる。本研究では大きなカテゴリーから論文の流れと内容を調べた。対照研究に現れた特徴としては誤用分析、アンケート調査、母語干渉などの次元と違って1:1の対照研究が多くなっている。これまではボイス、やりもらい、助詞、複合語や複合動詞など大きなカテゴリーからの対照研究が多かった。1:1の対照研究にある問題は対応可能なものと対応不可能なものが混在していることである。根本的な問題としては1対1の対応の可能なことと不可能なことを同一に取り扱うことができない為、二者を区分した上で学習の妨げになる要素を予見し、文法的、形態的、意味的に類似性、相違性を共に提示することによって学習者が効果的に学習できるであろう。

以上のように日本語文法研究は時代が変わっても大きな変化はないが、研究分野がより細分化し、理論的な研究より実際の教育の現場で応用できるような実用的な研究に変わってきていることが分かった。このような研究の変化は教育の変化に沿ったものと考えられる。これまでの理論的な研究から変化する日本語文法教育への応用、複雑な関係の中で生きていく人間の認知構造の解明のためにも益々多くなっていくであろう。

研究及び教育環境は常に変わり続ける。環境の多様性を認知し、これからの研究をより多様化し、深く研究する姿勢があれば長く研究が続けられるであろう。文法研究とは何を研究すべきなのか、基本的でありながら本質的な問題について工夫すべきである。文法研究、対照研究、日本語教育との関連性は螺旋のように絡みあっている。日本語文法研究と対照研究を通じ、日本語教育現場においてはそれを応用しつつ活用すべきである。これらの内容を積極的に活用する努力が研究者や教育者に必要となる。長い間、韓国での日本語文法研究は量的にも質的にも他の国より大きな成果を上げてきた。広く様々な媒体に発表された言語学論文や文法論文をまとめる上で、認知言語学や認知文法、人工知能やAIを応用する新たな研究方法に至るまで模索することが求められる。「日本語教育研究への越境」を可能にする観点として、「語用論的研究」「外国語との対照」「語の類義表現の研究」という3本の柱を立て、具体的な研究事例を通して、着目点や研究の可能性について探ることが有効になるであろう。日本語教育研究への越境は、日本語の見方の転換を伴うことにもつながるのである。

以上のように研究の多様性は言語の問題意識から出発した文法研究は日本語教育への応用と活用につながる。新しい研究の変化が期待される。

13. おわりに

本稿は日本語文法研究の現状と展望(2017~2018)である。2017年と2018年に韓国の学術雑誌に発表された日本語文法の研究論文の動向を調査し、その特色を明らかにし、今後の日本語文法研究の展望を

提供したいと思う。その文法研究の動向をいくつかのカテゴリーから分類し整理したものである。日本語の文法に関する研究論文は韓国研究財団に登録されている論文に掲載されたものを分析した。大きく分けて記述文法研究、日韓対照研究、対照研究を応用した翻訳研究、日本語教育と文法研究への応用、コーパスを用いた研究、認知意味論と認知文法、丁寧さと談話、その他様々な内容の研究があることが分かった。他にも、日本の言語学会や日本語学会に見られる日本語文法研究の動向も調査したところ、日本で行われている研究の方向性と内容は、韓国における研究のやり方とそれほど相違ないことが分かった。したがって、韓国での日本語文法の研究は国際的な研究の流れに沿っていると言える。

韓国の研究者は韓国では活発に研究を行っているが、日本の学会などでの発表や投稿は少ない。これは、各大学で日本の学術雑誌より韓国研究財団に登録されている学術論文をより高く評価しているからである。大学での評価の基準を変えない限りこのような現象は当分の間続くにちがいない。韓国での評価基準と関係なく韓国人の研究者が学問の研究のため、また教育の活性化のために、日本でも活発的に研究発表を行うべきである。また日本語文法教育の研究の深化と共に日本語教育文法の新しい可能性が窺える。これは研究の新分野である日本語教育文法の活性化にもつながるであろう。これまでの調査から日本語文法研究を実際の日本語教育に応用できるようにしたいというささやかな希望を持つに至り、その実現に向けて研究していく次第である。

【参考文献】

- 宋敏(1973)「古代日本語に影響を及ぼした漢語の影響」『日本学報』1 韓国日本學會 pp.29-57
- 李康民(2012)「韓国の日本語学研究の現況と課題」『日本学報』91 韓国日本學會 pp.1-8
- 李暎洙(2012)「韓国の日本語教育研究の現況と課題」『日本学報』91 韓国日本學會 pp.9-23
- 韓国日本学会(2003)『韓国日本学会総覧』時事日本語社
- 韓国日語日文学会(2008)『韓国日語日文学会30年史(1978-2008)』韓国日語日文学会
- 池上嘉彦・守屋三千代(2009)『自然な日本語を教えるためにー認知言語学をふまえてー』ひつじ書房
- 庵功雄(2001)『新しい日本語学入門ーことばのしくみを考えるー』スリーエーネットワーク
- 庵 功雄(2018『一步進んだ日本語文法の教え方2』くろしお出版
- 尾上圭介(1996)『文をどう見たかー述語論の学史的展開ー』『日本語学』15(9) pp.4-12
- 影山太郎(1993)『文法と語形成』ひつじ書房
- 小泉保(1993)『日本語教師のための言語学入門』大修館書店
- 真田信治(2017)「新しい日本語観に向けてー複数の日本語」という視点ー」『日本語学研究』52
- 韓国日本語学会 pp.5-16
- 高木丈也(2018)『日本語と朝鮮語の談話における文末形式と機能の関係』三元社
- 寺村秀夫(1982)『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版
- 寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- 時枝誠記(1941)『国語学原論』岩波書店
- 中右実(1994)『認知意味論の原理』大修館書店
- 中野研一郎(2017)『認知言語類型論原理「主体化」と「客体化」の認知メカニズム』京都大学学術出版会
- 仁田義雄(1997)『日本語文法研究序説——日本語の記述文法を目指して』くろしお出版
- 仁田義雄(1989)『現代日本語文のモダリティの体系と構造』くろしお出版

仁田義雄・益岡隆志(1989)『日本語のモダリティ』くろしお出版
野田尚史編(2005)『コミュニケーションのための日本語教育文法』くろしお出版
早瀬尚子・吉村あき子(2018)『言語の認知とコミュニケーション』開拓社
原沢伊都夫(2016)『日本語教師のための入門言語学』スリーエーネットワーク
益岡隆志(2007)『日本語モダリティ探求』くろしお出版
三上章(1963)『日本語の構文』くろしお出版
南不二男(1974)『現代日本語の構造』大修館書店
森篤嗣・庵功雄(2011)『日本語教育文法のための多様なアプローチ』ひつじ書房
森篤嗣(2018)『日本語教育への応用(コーパスで学ぶ日本語学)』朝倉書店
山岡政紀・牧原功(2018)『新版 日本語語用論入門: コミュニケーション理論から見た日本語』明治書院
山田孝雄(1936)『日本文法学概論』宝文館
渡辺実(1953)「叙述と陳述―述語文節の構造」『国語学』13(14) 国語学会 pp.20-34

韓国日本学会『日本學報』(<http://www.kaja.or.kr>)2017~2018
韓国日語日文学会『日語日文学研究』(<http://www.hanilhak.or.kr>) 2017~2018
韓国日本語学会『日本語學研究』(<http://www.jlak.or.kr>) 2017~2018
韓国日語教育学会『日本語教育研究』(<http://cafe.daum.net/kaje.or.kr>)2017~2018
日本語教育学会『日本語教育』<http://jpedu.or.kr>/2017~2018
大韓日語日文学会『日語日文學』<http://jalalika.org/>2017~2018
韓国日本語文学会『日本語文學』<http://www.gobungaku.or.kr/> 2017~2018
日本語文学会『일본어문학』 <http://trijapan.iwinv.net/>2017~2018
日本文化学会『日本文化學報』<http://bunka.or.kr/>2017~2018
韓国日本言語文化学会『日本言語文化』 <http://kojap.org/main/>2017~2018
日本語学会<https://www.jpling.gr.jp/>『日本語学の研究』2017~2018
日本語文法学会 <http://www.nihongo-bunpo.org/>『日本語文法』2017~2018
公益社団法人日本語教育学会 <http://www.nkg.or.jp/>『日本語教育』2017~2018
日本言語学会 <http://www-japan.org/>『言語研究』2017~2018

〈요지〉

문법 연구의 현황과 전망

본고에서는 2017~2018년에 걸친 일본어문법 연구의 현황 및 앞으로의 전망을 살펴본다. 검토 대상은 한국연구재단에 등재된 10종의 학술지에 수록되어 있는 일본어문법 연구 논문으로 한정하였다. 이 연구의 목적은, 최근의 일본어문법 연구의 동향을 분석하고 일본어문법 연구에 대한 새로운 전망을 제공하는 것이다.

대상 논문을 살펴본 결과, 기술 문법 연구·한국어와 일본어의 대조 연구·대조 연구를 이용한 번역 연구·문법 연구 결과의 일본어교육 응용·코퍼스를 이용한 문법연구·인지언어학과 인지 문법·경어와 담화 등등 주제가 다양하였다. 한국뿐만 아니라 일본의 일본어학회, 일본어문법학회, 일본어교육학회, 언어학회에서 발표되는 일본어문법 연구 경향도 확인한 바, 한일 양국의 일본어문법 연구 흐름은 유사하지만, 일본에서는 일본어교육문법이라는 새로운 형태와 방법론이 서서히 일어나고 있음을 감지할 수 있었다. 이를 볼 때, 앞으로 한국에서도 일본어교육문법 연구라는 새로운 변화가 나타날 것으로 예상된다.

다만, 최근 몇 년간 일본에서 개최되는 학술대회 및 세미나, 학술지 등에 한국인 연구자의 발표나 논문이 그다지 눈에 띄지 않는 점은 아쉽다. 이는 한국학술진흥재단이나 각 대학에서 일본에서의 학술 발표나 논문보다 한국연구재단에 등재된 학술지에 게재된 논문을 더 인정하기 때문에 나타나는 기현상일 것이다. 한국의 평가 기준이 바뀌지 않는 한, 이러한 현상은 당분간 계속될 것으로 보인다. 더 우수한 결과를 얻기 위해서는 한국의 평가 기준이 바뀌거나, 평가와 상관없이 순수하게 학문의 발전만을 위해 애쓰는 연구자들이 많이 나와야겠지만 현실적으로 쉽지 않은 일이다.

앞으로의 과제는, 위에서 열거한 다양한 연구들을 문법교육과 일본어교육이 상호 유기적으로 연계할 수 있는 방안 즉, 교육현장에서 문법교육에 활용하는 방안을 모색하는 일일 것이다.

논문분야 : 통사론, 형태론

키워드 : 인지문법연구, 문법연구, 코퍼스연구, 대조연구, 기술적 연구

■ 이경수 (李暲洙)

한국방송통신대학교 교수

kslee@knou.ac.kr

■ 投稿日 :	2018년	12월	30일
■ 審査開始 :	2019년	1월	14일
■ 審査完了 :	2019년	2월	10일
■ 掲載確定 :	2019년	2월	11일